

● シリーズ 私の見た日本 Vol.167

台湾・アメリカ・日本

— そこで生まれ、建築を学び、経験したことから —

呉 勝陽/Ray Wu (ご しょうよう/レイ・ウー)

1975年台湾台北市生まれ。1997年から2002年まで台北のインテリアデザイン事務所勤務。アメリカのサンフランシスコアカデミー・オブ・アート大学へ留学。2005年卒業後、アメリカの構造事務所、上海のコンサルタント事務所での実務経験を経て、2007年に光井純&アソシエーツ建築設計事務所及びペリ クラーク ペリ アーキテクト ジャパンへ入社。現在は両事務所の執行役員兼プロジェクトディレクターとして業務を行っている。



©Takuo Sato

台湾に生まれ志した道

小さい頃から私の父親が日本の電機メーカーと仕事をしてきたこともあり、日本文化に興味を持ち、いつか日本に行きたいと思っていました。しかし、進学の際はアメリカのサンフランシスコにある大学に行くことを決めました。その理由としては、西洋建築を基本から学び、空間構成や環境配慮、歴史の関係など様々な角度から学び、西洋と東洋の建築の違いを知り見識を深め、建築とインテリアのデザイン力を磨きたかったからです。

大学を卒業後はサンフランシスコに留まって、構造事務所に半年勤めました。次第に日本の建築への興味が再燃し、ちょうど今から13年前に東京へ行くことを決めました。最初は日本語を書くことも話すこともほとんどできませんでしたが、縁あって、今働いている光井純&アソシエーツ建築設計事務所に勤めることになりました。これまで様々なプロジェクトを経験し、現在もアジア諸国を中心にプロジェクトを遂行しています。

西洋ミックスの文化を持つ日本と台湾

日本の建築設計事務所アジアのクライアントと仕事をしていてよく実感することは、台湾や中国や、韓国など、彼らたちはやはり日本の最先端技術を期待しているということです。昔から台湾の建築は非常に日本と似ている建物が多く、時代の変化とともに様々な建築物を残しています。一方で、台湾は西洋の文化にも憧れを抱いており、いわゆる和洋折

衷というようなデザインも見られます。

日本はアジアの中で数少ない先進国のひとつであり、いろいろな建築のノウハウを持っています。特に近代建築において、18世紀末からアジア各国にいわゆる和式西洋建築を建て、民間の建物にも影響を与えています。

ご存知の方も多いと思いますが、台湾は19世紀末～20世紀前半まで日本の植民地でした。日清戦争に勝利した日本が台湾を統治した時代、多くの日本人建築家が台湾へ渡り、特に西洋建築を学んだ巨匠建築家の辰野金吾の影響が反映された建築物が多く見られます。今の中華民国総統府(旧台湾総督府)はその一例ですが、東京駅を設計した辰野金吾がデザイン監修を行い、彼の教え子である森山松之助・長野宇平治が設計しています。これは辰野式建築と呼ばれる技法で、東京駅にどことなく雰囲気似ているのはこのためです。また、同時期に台湾の都市計画事業に関しても日本の建築家である中村綱や早川透が設計しています。

※辰野式建築：赤レンガに白い石を帯状に巡らせるデザイン

当時の代表的な建築群のひとつ、迪化街^{ていかがい}が今でも台北市内にあります。歴史深く様々な時代の建築様式の建物が混在している街で、近代建築様式が最も多くこれが日本統治時代に建てられたものに当たります。中には、竹をモチーフにしたデザインの建物もあるなど日本の細かさや日本の美学が反映されています。

アメリカで学んだ後、見てきたアジアの中の日本

このように、台湾は近代建築において日本の建築家の影響を非常に受けており、今も継承し保存しています。そして台湾建築・日本建築が影響を受けた西洋の建築を学ぶべくアメリカへ渡った私は、歴史や文化からくる建築の違いというものを知りました。台湾に生まれ、アメリカで学び、西洋と東洋の根本的な違いやお互いの影響を知り、いよいよ日本で仕事をして、実感したことがあります。それは、国による文化や環境、社会的背景の違いも影響していると思いますが、アジア各国の建築法規は日本とアメリカの間を取ったようなものが多いように感じました。その中でいくつか例に挙げてご紹介します。

集合住宅タワーの場合、日本では、外観は控えめなものが多く、ほとんどの集合住宅タワーではバルコニーは建築物を一周するように設置されています。その理由としてひとつは消防避難のため、建物内に避難階段以外に第三避難ルートを確保しなければならないことが挙げられます。また、各階の住戸ユ



迪化街



左/新北市三峽区の三峽老街 右/三峽(西洋と東洋の建築が織り交ざった表現)



左/台中駅 右/中華民国総統府(旧台湾総督府)



ニット数が他の国に比べると多く単調になりがちなので、外観をデザインする際、個性や奇抜さ、ひと目見た時の驚き、言うなれば“WOW”感に欠けることが多いように思われます。逆に海外の場合は、建物にいろいろな表情をもたせることができます。環境よって横や縦の庇を付けることができ、住戸の大きさも日本より2、3倍は大きくて、しかもバルコニーの空間に様々な工夫を凝らすことができます。

そして、台湾と日本は共に環太平洋地震帯に位置していますが、地震の揺れ軽減方法や構造のスパンの条件を検討する際にも違いがあります。日本のオフィスの奥行(コアから外壁まで)は台湾よりもかなり大きいです。一般的に日本では18mから22m程度とされていますが、台湾の場合は大体14mくらいです。日本でのオフィスは大きなオープンスペースとして使用しており、パーティションや個室をあまり使っていません。さらに各階の床面積は5,000㎡を超えているオフィスが多くあります。最近では賃貸オフィスが多く、空調設備も建物に対して1つの装置で操作する中央空調設備から、ユニットごとに設置されそれぞれで操作ができる独立空調設備に変更しているものが多いです。新鮮な外気は機械換気で提供し、徹底的に湿度や温度を管理しています。他のアジア諸国では、まだ窓を開けて換気する機会が多いため、ここまで細やかに計画された空調設備はかなり珍しく、日本の特徴と言えます。

ホテルや宿泊施設に関して言えば、海外からの観光客が日本を訪れた時に一番よく聞く印象として、日本のホテルは狭く、客室のトイレも全て収まっているユニットバスに驚く、ということがあります。しかし最近では高級ブランドホテルが日本に広まっていて、日本らしさやおもてなしの精神を導入し、「日本文化を感じながら心地よく泊まることのできるようになった」という外国人観光客の声が多



台北市内の繁華街。様々な要素が入り混じった風景



左/MODESTY HOME/謙岳(台湾の実例) 中/SKYZ TOWER & GARDEN(日本の実例) 右/綺麗な街中に建つインパクトのある商業建築(ジアイス キューブス/東京都)

くなっています。さらに最近話題の日本のホテルブランド「星のやリゾート」は、日本の文化、繊細さ、おもてなしを巧みに演出して、お客様が見えない所までもサービスやホスピタリティを追求しています。また、日本の文化や伝統を感じることができるという点で、地方の旅館も外国人観光客に人気が出ています。昔からの建物をきれいに改修して運営し、伝統や名産物などを今でも保存し継承し、誇れる日本文化を世界に発信していることは、海外の観光客にも評判です。

そして、日本の商業建築に関しては、まだまだデザインの可能性が大いにあると思います。私の考察ですが、江戸時代上方の商人を中心とした賑やかな元禄文化も影響してか、商業建築は他の建築物に比べると、かなり派手な表現が見られます。通りから路地までごちゃごちゃとした街に、日本は面白い風景がたくさんあります。綺麗な街と路地が共存している光景は、外国人の目線からはインパクトがあり不思議です。アジアの他の国では繁華街にこれほど綺麗に商業建築を存在させることはなかなかできません。経済的な誘導で世界中から大手の有名ブランドが日本に上陸し、さらにブランド競争が激しくなっていることは納得できますし、それに伴って、日本の商業建築は世界中のデザイナーの聖地になってきていると感じます。

日本の素晴らしさを世界に発信したい

人件費が高い日本では、工事現場の作業効率を上げつつも高い品質を維持するために、建材や構造などフォーマット化されたものが多く、オーダーメイドではなかなか造れません。そのため、設計の自由性は制限さ

れていると思います。しかし、日本のゼネコンの技術は世界一流です。現場は綺麗に整備され、職人さんの優れた技術と最高の安全性をもって短期間で良い建物を作っています。それは日本が誇るべき、素晴らしいことです。アジアの他の国の現場へ行ってみると、毎回現場の検査状況はまだまだ十分とはい切れず、あまり整備のされていない現場を経験して、かなり苦労をしました。

台湾に生まれ、アメリカで建築を学び、日本で長く働いてきた自分を振り返ってみると、それぞれの国で暮らし、様々なものを観察しながら多くのプロジェクトの設計を経験したことが、設計活動において自分の強みになりました。アジアのクライアントは、プロジェクトに関してその設計プロセス、つまり“物語”をかなり重要視します。そして、設計プロセスにおいては、クライアントと自分自身の双方が十分に納得できることが大切です。自分のルーツや自国の歴史的な建築、日本やアジアにおける最近の集合住宅、商業建築についてなど、様々な観点からお話しましたが、どんな国に対しても建築家はその地の人々と文化をしっかりと理解して、デザインに反映していくことが最も大事だと思っています。そして、異なる国で建築の仕事に携わるには言語能力や知識だけでは足りません。デザインに対する意欲や強いチャレンジ精神が必要になります。日本の建設業は、世界の他の国が参考すべき部分がたくさんあります。私はこれからも、常に情熱やチャレンジ精神を持って日本の建築・建設業の素晴らしさを世界のあらゆる国へ広められるよう設計の仕事に奮闘していきたいと思っています。